戦後70年 シンポジウム

宗教と平和

―中東とチベットの現実から問う平和への道―

開催日：2015（平成27）年7月25日（土）
会場：築地本願寺 本堂

二〇一五年七月二五日、築地本願寺において、戦後七〇年シンポジウム「宗教と平和――中東とチベットの現実から問う平和への道――」が開催されました。

戦後七〇年を迎える今年、浄土真宗本願寺派では七月から九月にかけて、各地でさまざまな平和の企画を開催します。こうした活動の一環として、本シンポジウムを企画しました。紛争の現実という視点を失うことなく、平和と宗教の問題について議論を深めることがこのシンポジウムの目的です。

今回は、特に中東とチベット・ネパールにおける問題を専門家の方々にご教示いただきました。中東では、「イスラーム国（IS）」と名のるテロ組織が、イラク・シリアを中心に紛争を巻き起こしています。昨年、日本人ジャーナリストを拉致（らち）・殺害した事件は皆さまの記憶にも新しいことでしょう。

他方、チベットでは中国政府による迫害を受け、多くの難民が生まれています。特に隣国にあたるネパールでは、この難民の存在が大きな社会問題となっています。しかし、こうした状況は、なかなか私たちの問題として考えることは難しいのが現実です。

そこで、各地の現状に詳しく、実際に現地で活動を展開される三名の専門家に、中東とチベット・ネパールの問題についてお話しいただきました。それをもとに、宗教が有する課題、教団や宗教者の果たすべき役割、さらには、日本のおかれている現状について考えました。

本稿では、当日の様子についてご報告いたします。

ネパール大地震の報告

●Uma Lama Ghising（ウマ ラマ ギシン）（本願寺派僧侶）

Uma Lama Ghising 氏

ネパール開教地・カトマンズ本願寺僧侶。現在、龍谷大学真宗学科4回生。

シンポジウムに先立ち、ネパール開教地のカトマンズ本願寺に所属するウマ・ラマ・ギシン（通称 アシュマ）さんから、本年四月に発生したネパール大地震の現状について、ご報告いただきました。

冒頭、アシュマさんは、震災への皆さまのご支援に対して厚く御礼を述べられました。ネパールでは、八二年ぶりに起こった大地震により、約九〇〇〇名の方が亡くなられました。現在も、多数の小学校や公共施設が倒壊したままで、家の無い子ども、親を失った子どもなどがたくさんおられます。

カトマンズ本願寺では、震災直後から被災者の支援活動を地道に続けています。しかし、ネパールの政治不信の影響などにより、住民は大きなストレスを抱（かか）えており、支援活動にも支障が出ています。軍隊と行動を共にしなければ、支援者が危険に巻き込まれる可能性もあります。カトマンズ本願寺では、こうした状況の中、まさに命がけで食料を配布し、多くの人々が一時的に居住できる施設を建設するなどの支援を行っています。

また、ネパールの紛争の現状についても、ご報告をいただきました。いまだ憲法が制定されていないネパールでは、ヒンドゥー教を国教にしようという運動が近年起こり、それに反対するデモも盛んに行われています。宗教をめぐり、賛成派と反対派が対立する状況を踏まえて、「一般的に宗教は平和をもたらすものと考えられているが、そうではない場合もある」と指摘されました。そして最後に、「ネパールでは、仏教に対して『平和』のイメージが浸透しています。そのイメージを壊さぬよう、これからも仏教徒としてネパールに貢献していきたい」と結ばれました。

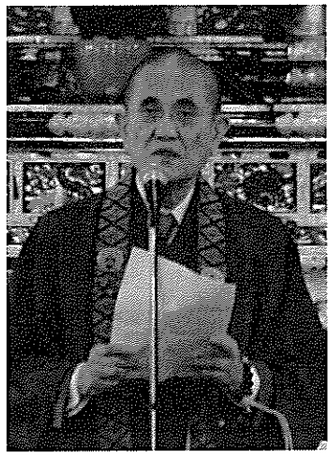
「平和」の象徴とされる仏教のイメージを維持するために、私たちはいかに行動すべきか。平和構築にどのように貢献していくことができるのか。大きな課題をいただいたのと同時に、引き続き、ネパールの復興支援を行っていくことの重要性を実感いたしました。

《開会挨拶》

●石上智康（総長）

本日は、大変暑さの厳しい中、浄土真宗本願寺派主催のシンポジウム「宗教と平和」にご参加いただき、誠にありがとうございます。

戦後七〇年、七〇回目の「終戦記念日」をおよそ二〇日後に控えた本日、こうして、皆さまとあらためて「平和」について、ご一緒に考えさせていただく機会が得られましたことは、大変に貴重なことであると存じます。



本日は皆さまに二つのことを申しあげ、シンポジウム開催のご挨拶とさせていただきたいと存じます。一つ目は、「記憶の忘却」という問題です。

一九三七（昭和一二）年、日本と中国との間で戦争が起きました。その後、一九四五（昭和二〇）年八月一五日まで、実に八年間に及ぶ戦争へと突入していくことになります。世界が枢軸国と連合国に分かれて、覇権を争った結果、死者数約五〇〇〇万人以上という人類史上、例を見ない惨状を生むこととなりました。

私は、この東京に生まれ育ちましたが、昭和二三年の春、疎開先から東京に帰りまして、地下鉄の虎ノ門駅から地上に出た途端、当時の文部省旧建物以外、見渡す限り焼け野原になっておりました。虎ノ門から新橋の方に向かいまして、東海道線の陸橋までがすべて見通せたことを今も鮮明に覚えています。多くのかけがえのない命が奪われましたが、私の妹もその一人です。

しかし、七〇年という時間が経過し、戦争を経験した方々が少なくなってきております。戦争の記憶が失われていくという中で、「忘却」といかに対峙するのかということが、とても重要なこととなっています。

もう一つは「未来の創造」の問題です。現在、私たちが生活する日本という国が、大きな転換期にあるように感じられます。グローバル化によって、世界が繋がり、遠くの地域で起きた紛争が、国境を越えて影響を与えるようになりました。テロリズムが国境を容易に越えてしまうことに見られるように、二度の大戦に比べると、戦争の様相には大きな変化が見られるようです。

また、見逃せないのは、そこに宗教がしばしば介在しているということです。それぞれの宗教が「平和」を志向していることは疑いようもありませんが、他方、残念なことに、人びとを戦争へと駆り立てる力として時に宗教が利用されているようにも見えます。宗教が戦争に関係してしまうことは、歴史上繰り返されてきたことですから、宗教と争いの問題について、立ち止まって深く考え、未来を展望していく必要があると思っております。

仏教では「三世」と申して、過去・現在・未来という三つの時間の中で、今という時間を考えることの大切さを説きます。「記憶」が時間とともに風化していくことは自然の理でありますが、記憶は未来を創造する営みに繋がることで、新たな価値を生み、再生してまいります。

戦後七〇年という現在を生きている私たちだからこそ、過去が失われそうになっている今を生きる私たちだからこそ、過去と未来を結ぶ「現在」の状況をしっかりと踏まえ、未来を創造しなくてはならないと思っております。

なお、順序が前後しましたが、本日は、三人の先生方から、世界の紛争の「現在」をお聞きすることになっております。先生方のご提言を通して、世界のリアルな紛争の状況を理解し、平和を実現する手段を、皆さまとともに考えてまいりたいと思っております。

三人の先生方におかれましては、暑さの厳しい中、またご多忙の中、本日のシンポジウムにご協力いただきましたことを心より御礼申しあげまして、開会のご挨拶とさせていただきます。

第一の提言

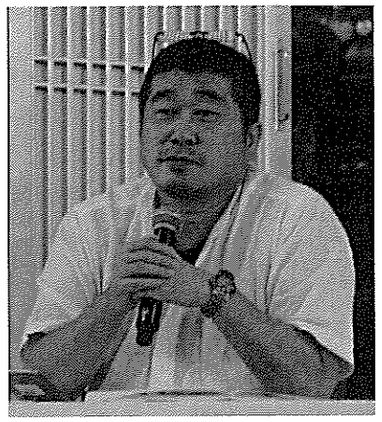
●伊勢崎賢治（東京外国語大学教授）

伊勢崎先生は、東京外国語大学で教鞭をとられる一方で、NGO・国際連合職員として世界各地の紛争地帯での紛争処理や武装解除などに当たった実務家でもあり、「紛争解決請負人」とも呼ばれておられます。先生の数多くのご経験やそこから得られた平和についてのお考えをお話しくださいました。

伊勢崎先生は、現在国会で議論されている「平和安全法」を理解するために、

①「PKO活動（平和維持活動）」
②「非国連総括型（有志連合）」
③「周辺事態（対近隣諸国）」

の三つに分類して説明されました。①については、アフリカを例に出して説明されました。アフリカは政府や警察といった社会の基本構造が脆弱な地域が多く、私たちが輸入している資源などをめぐって内戦が起こり、何十万人という単位の人間が死ぬことがあります。こうした中、



伊勢崎 賢治 氏

専門は、国際関係論
著書に、『本当の戦争の話をしよう――世界の「対立」を仕切る』（朝日出版社、二〇一五年）など。

国連として「人道的支援」として住民保護を行う活動が①です。この活動には、自衛隊が派遣されており、現在も南スーダンで施設建設などの活動を行っています。

②については、NATO（北大西洋条約機構）によるグローバルテロリズムに対する戦争を例に出されました。しかし、対テロ戦争は一三年かかりましたが軍事的には敗退し、今は、武力による解決ではなく、良い社会・国をつくることでテロを無くそうという流れになっているそうです。しかし、敵として戦ったアメリカには、こうした役割が果たせず、現在は中国が中心になっていると説明されました。

③については、戦争の口実は、「個別的自衛権」「集団的自衛権」「国連としての武力措置」しかない、つまり自国が侵略されるか、軍事同盟を結ぶ他国が侵略されるか、あるいは①のような国連による支援しかないのであり、「われわれが口実を作らせない限り」近隣諸国による侵略はないと明言されました。口実を作らせないためには、軍事力の積み上げだけでなく、内政を良くすることが大切だと指摘されました。加えて、国防について冷静に考えることも重要で、例えば海岸にある原子力発電所に外から見えないように屋根を建設するといった、テロ対策の国防の方が必要であり、自衛の本質を理解することの重要性をご提言されました。

伊勢崎先生のご提言においては、私たちがどのような活動や立場を選択するのかという課題が突きつけられました。②に関与して敵国となると、脆弱な社会への支援や、テロリストとの対話といった場への参加が困難となります。また国防については、誤った危機感や脅威論から、国の在り方を論じることの危うさが指摘されました。伊勢崎先生の三分類も含め、「平和安全法」について的確に理解し、考えていくことが必要ではないでしょうか。

第二の提言

●池内恵（東京大学准教授）

東京大学で教鞭をとられている池内先生のご専門は、イスラームの政治思想です。イスラームが政治的な集合行動をもたらす過程について、理論や歴史などの視点からお話しくださいました。

池内先生は、まずイスラームという宗教が、日本の様々な宗教のイメージと異なる面があることについて説明されました。

先生によると、日本では、宗教は「平和」をもたらすものと理解されがちです。これは大変素晴らしいことかもしれませんが、世界を見渡すと、必ずしも宗教は平和と結びついていないのが現実です。その代表例が、イスラーム国です。

イスラーム世界においては、宗教は義務を課すものであり、その義務は物理法則の如く絶対的に正しいものです。日本人には感覚的に理解し難いかもしれませんが、重いものを高いところから落とせば、下に落ちていくのと同じように、神の言葉は絶対的に正しい。だから、それを信じるかどうか「選択する」などという権利は人間にはないのです。

重要なことは、その神の言葉の中に、「やるべき戦争」について示されていることです。『コーラン』には、神の基準に反するものとは戦うことを肯定する内容が記されています。「国際法」では、戦争そのものが基本的に違法であり、自衛のために闘うことだけが例外として認められています。しかし、イスラーム世界では、「国際法」より「神」が優先されます。ですから、根本的にかみ合わないのです。まさしく、「宗教＝平和」という私たちの宗教に対するイメージとは大きく異なる実態が存在しています。

また先生は、アラビア語でイスラームの宗教的・政治的共同体を意味する「ウンマ」という繋がりが、地理的違いや文化的違いを乗り越えるものであると指摘されました。人種や言語が異なっても、皆同じ『コーラン』を読んでいるから、思考が極めて似ている。こうしたネットワークの中から特に過激な連中が集まり、昨今のイスラーム国の拡大・分散に

池内 恵 氏

専門は、イスラーム政治思想
著書に、『イスラーム国の衝撃』（文春新書、二〇一五年）など。

繋がっていると説明されました。

質疑の際には、「どのように、こうした状況を収束させていくことができるのか」との質問が出ましたが、先生は、「それがわかればノーベル平和賞を獲れるくらいの難問」と前置きしつつ、「一人ひとりの人間の価値を大切にすることが重要ではないか」と述べられました。

関連して、伊勢崎先生から、「テロは自分探しの若者や、社会から排除された人が起こすのであり、日本でもいつ起こるかわからない状況にある」というご指摘がありました。テロは国家を越えて行われるのであり、社会の隅に排除された他者を生み出さない社会作りの大切さを痛感させられました。誤解による差別を生じかねない「イスラーム」について、学んでいくことの重要性も感じさせられました。

第三の提言

●定光大燈（DIC事務局、本願寺派僧侶）

定光先生は、備後教区比婆組西楽寺でご住職をされながら、長年、ネパールやインドのチベット難民を支援する活動に従事されています。今回は、難民支援の実際の活動を中心に、先生のお考えになる宗教者の役割についてお話しくださいました。

先生は、ネパールに携わってきたご経験から、次第に難民の置かれている状況が不安定化していると指摘されました。一九六〇年頃から、中国の侵略によって、チベット人たちの多くがインドやネパールへ亡命しました。当初、ネパールではそうした難民を国連などと協力して、受け入れる体制を整えました。

定光 大燈 氏

DICは、チベット難民を支援している組織

業績に、『迦羅羅法話集⑥ おかげさまの「いのち」』（探究社、二〇〇六年）など。

しかし、政権交代の影響などから、次第に亡命者の取り締まりが強化されます。以降、ネパール国内でも次第に中国の影響力が増大し、ついに二〇〇五年にはチベット亡命政府のカトマンズ事務所が閉鎖に追い込まれるなど、チベット難民への風当たりは厳しさを増しました。

こうした状況下で、特に、子どもたちが不安を抱えながら生活していることについても、学校で行ったアンケートを元に説明してくださいました。

先生によると、子どもたちはそうした厳しい環境の中でも、ダライ・ラマ法王の以下の三つの使命を忠実に実践しているそうです。

①「人類の幸福を達成するための多様な倫理の尊重」、

②「他宗教との調和と相互理解」

③「平和と非暴力の仏教文化の堅持」

最後に先生は、チベット難民が大切にする「平和と非暴力」の心が、浄土真宗の非戦平和のみ教えと通じ合い、互いに理解を深め合える契機となりえることを強調され、提言を終えられました。

弱い立場にある難民を支援していくことの重要性が強く感じられるご提言でした。また、難民支援という尊い取り組みが、地道に行われていることを知り、宗門全体の取り組みへと展開していくことの可能性についても考えさせられるご提言でした。

《所感》

●丘山願海（本願寺派総合研究所長）

私は、当日の先生方のお話を通して知らされる世界の現実に対して、大きな悲しみを抱きました。縁あってこの世に命をいただいた私たちが、どうして互いに争い、傷つけ合わねばならないのでしょうか。

お釈迦さまは、争いの絶えない愚かな世界をつくり出しているのは人間の「渇愛」、限りない「欲望」、「無明」だと言われます。すなわち、人間の「愚かさ」です。

シンポジウムを通して、本当に人間の愚かさを実感しました。世界を自分の都合のいいように支配しようとする人の愚かさ、そういうものを止められない私たちの愚かさ。人間であるかぎり、愚かさを克服することは困難かもしれません。しかし、克服できないから諦めるということがあってはなりません。武器のない平和を実現することは大変に難しいことかもしれません。

それでも、私は諦めません。理想に向かう努力を続けることこそ人間の価値ではないでしょうか。

国を守るために争いを起こし、殺し合うような世界は終わりにしたい。自己と他者を区別し、不都合な相手と憎しみ合うあり方を根本から見直し、「自他共に心豊かに生きることのできる社会」（宗制）を築いていきたい。そういう世界を実現するために、私たちは人間の「愚か

さ」について常にメッセージを送り続ける必要があります。ここに宗教者としての重要な役割があるように感じています。

もう一つは、戦争を起こす原因とされる貧困や差別の問題に取り組んでいくことです。生老病死すべてに関わる仏教徒は、こうした問題に具体的に貢献できるのではないかと思います。

今回のシンポジウムでは、たくさんのヒントをいただきました。私たちはどんな困難があろうとも、希望を捨てない。世界から武器をなくす。そういう願いをもって私も「平和」について模索してみたいと思っています。戦後七〇年をきっかけに、皆さんも「宗教と平和」の問題について、ぜひご一緒に考えてみてください。

（本願寺派総合研究所・教団総合研究室）

1　イラクとシリアで発生したイスラム過激派組織で、ISや、ISIL、ダーイシュ、「イスラム国」と呼ばれることもある。なおISISは、Islamic State of Iraq and Syria（イラクとシリアのイスラム国）の略称を由来としている。イラクとシリアの国境地域を中心として、武力支配し、「カリフ国家」の建設を主張している。カリフとは、イスラーム国家の最高指導者の称号であり、代々世襲されていったが、これに反発して分派したのがシーア派であり、逆にカリフの権威を承認しているのがスンナ派である。